

## 東西文明の比較 (23)

▼唐は「内憂外患」▲

陽光新聞社・顧問  
塩澤宏宣

### 正式な国交・交流の時代

日本と中国は、長い歴史を持つ隣国ですが、正式な国交があった時期は決して長くありません。邪馬台国時代をしばらく措けば、4世紀末から5世紀末までの「倭の五王時代」、7世紀初期からの「遣隋使・遣唐使の時代」、そして15世紀初めから150年ほど続いた「日明貿易の時代」が全てです。遣隋使は600年に始まり、最後の遣唐使が出発したのは838年ですから、この間200年余りでしかありません。

隋の建国は589年、隋を引き継いだ唐の建国は618年で907年には滅亡しました。その間わずか318年です。あら

ゆる分野で「煌びやかさ」ばかりが言い伝えられているようですが、隋・唐は「内憂外患」でした。そうした状況を知るにつけ、日本海の荒波を越えて大陸へ渡った日本の遣使はどのように先進国の諸々を学んだのでしょうか。

### 中唐(8世紀半ば～)滅亡の影

安史の乱<sup>注</sup>で疲弊した唐は、中央アジアのみならず西域も保持することが難しくなり、国境は次第に縮小して世界帝国の威力を失っていきます。こうした状況に対して、中興の祖と謳われた憲宗は、中央の禁軍を強化して中央の命令に服さない節度使を討伐し、朝威を回復させることに成功しました。しかしその後、不老長寿の薬といわれた丹砂(水銀)をはじめ、怪しげな仙薬を常用するようになり、精神に不安定をきたして宦官をしばしば殺害したため、恐れた宦官により殺されました。後を継いだ孫の文宗は権力を握っていた宦官を誅殺しようと策略を練ったが失敗し(甘露の変)、かえって宦官の専横を招きました。

### 晩唐(9世紀半ば～10世紀初頭)「乱」が全国に及ぶ

文宗の弟の武宗は廃仏毀釈を進めました。当時、脱税目的で僧籍を取る者が多かったため、実態の無い僧

を還俗させ財政改善を図りました。この時期、牛僧孺<sup>きゅうそうじゆ</sup>党派と李德裕<sup>りとくゆう</sup>党派の政争が激しくなりました。これを「牛李の党争」といいます。

この頃から、859年の裘甫<sup>きゅうほ</sup>の乱、868年の龐勛<sup>ほうくん</sup>の乱に代表される、武装闘争が各地で起きました。やがて874年頃から「黄巢<sup>こうそう</sup>の乱」が起きます。この乱は10年に及び全国に波及、黄巢は長安を陥落させると斉を建てて、皇帝就位を宣言しました。しかし黄巢軍の構成員は多くが貧民出で政務を執行できず、略奪を繰り返して民衆の憎悪を買った挙句に長安を去りました。

この時、黄巢の部下だった朱温は黄巢を見限り唐に帰参。朱温は唐から全忠の名前を賜り、以後朱全忠と名乗りました。この頃になると唐朝の支配地域は主に首都・長安から比較的近い関東地域一帯にまで縮小し、藩鎮からの税収も滞りました。河南地方の藩師となった朱全忠は、唐の朝廷を本拠の開封に移し、唐の権威を借りて勢力を拡大しました。

907年、朱全忠は哀帝より禅譲を受けて後梁を開き、ここで唐は滅亡します。しかし、唐の亡んだ時点で朱全忠の勢力は河南を中心に華北の半分を占めるに過ぎず、各地には節度使から自立した群国が乱立しました。後梁はこれらを制圧して中国を再統一する力はなく、中国は五代十国の分裂時代に入ります。唐の滅亡により、中国は東アジア文明をリードする力を失い、契丹や日本など、唐文化の影響を受けた周辺の諸国は独自の発展をしていくことになります。

### 「遣隋使」の足跡

隋は581年に建国し、618年に唐に滅ぼされました。その間、日本からは600年に第1回の遣隋使派遣し、都合4回派遣しました。

「日出づる処の天子、書を日没する処の天子に致す。  
つが  
恙なきや」

隋の煬帝を怒らせた「国書」の一文です。中国王朝の皇帝は、天から委任された唯一人として、文化の中心である中華と、その周辺の蛮人たちに君臨している建前です。東夷の倭が、「天子」を名乗ることは、無礼この上もないこと。かつて「日出づる処」と「日没する処」が問題視されていましたが、仏典の表現では、単に「東」「西」を意味するだけで、優劣の意味はありません。

次の一文は、第2回の遣隋使のしたためたものです。「聞く、海西の菩薩天子(煬帝)、重ねて仏法を興すと。

故に遣わして朝拜せしめ、兼ねて沙門数十人、来て  
仏法を学ばしむ」

隋の文帝と煬帝は、熱心な仏教信者でした。その情報を知った倭は、積極的に留学僧を送り込みました。それには、倭の国内事情があったのです。当時は蘇我氏に支持された推古天皇が、甥の聖徳太子と蘇我馬子に政治を委ねていました。推古朝は、冠位十二階の制定や中央での官司制の発展、全国的な屯倉の設置などが有名ですが、「仏教への肩入れ」も重要な仕事でした。飛鳥寺・法隆寺・四天王寺などの本格的寺院の建設はこの時代に完成しています。

ここで、聖徳太子に絡んで、もう一つ「十七条の憲法」について。この憲法は、役人の服務規程です。第1条の「和を以て貴しと為す」ばかりが有名ですが、第2条「篤く三宝を敬え(仏教を熱心に信仰せよ)」と第3条の「詔を承っては必ず謹め(君主の命令が絶対である)」を一体で考える必要があります。国家体制の中央集権が進み、仏教が国家の管理下に入った時期であれば、この条文配列が行われるとは考えられません。第2条と第3条の順番が逆か、場合によっては、第3条が冒頭に来ても不思議ではないのでは…。

### 外交使節としての遣唐使

遣唐使は、630年の第1次派遣から、894年の第20次まででした(海難事故などで未着のものや第20次のように出発前に中止したものなどを含みます)。

遣唐使最大の使命は、国と国の「対等関係」の構築でした。この使命は遣隋使の時と同様でした。ひとくちに遣唐使といっても、200年以上にわたる歴史がありましたから、それぞれの国の情勢に、様々な変化がありました。そこで、その歴史は三期に分けてあります。

第1期は、630年の第1次から、669年の第7次まで。

この時代、朝鮮半島は高句麗・百済・新羅の三国が対立しており、この情勢を背景に、朝鮮半島を直轄支配しようとする唐と、朝鮮諸国に対する影響力を維持したい倭との間で、深刻な対立がありました。やがて新羅の要請で唐は半島に出兵。倭は百済の応援で半島に出兵しました。唐と倭は、直接対立したのです。「白村江」の戦いです。倭は、唐・新羅連合軍に完敗して朝鮮半島から撤退しました。やがて高句麗も唐に滅ぼされるに及んで、倭は唐に対して恭順の意を表明するために、

669年に第7次遣唐使を派遣しました。「新唐書(日本伝)」には、この使節を「高句麗平定を賀するものであった」と記されています。倭は、その後の30年にわたり遣唐使派遣を断絶し、唐の侵攻に備えて防御策に専念しました。

### 朝貢下での第2期、国号を「日本」に

30年の空白を経て、702年の第7次から、777年の第16次まで。

「又倭国は、武皇后、改めて日本国と曰う」

唐の張守節が著した「史記正義(736年)」にある一文です。高宗の後である則天武后(武皇后)が、唐を廃して周朝を立てていた時期に交流が再開されました。一転して、倭が朝貢する形での再開でした。先の「敗戦」がその理由ですが、従来の「倭」を捨てて国号を「日本」にしたのも、関係があるのではないのでしょうか。そのせいか、この期間は穏便に進みます。

### 国際関係が変わる第3期

第3期の遣唐使は、平安時代の2回だけです。この時期になって派遣間隔は、25～30年になります。日唐交流も150年を超えて、多くのことを学ぶことに成功したことが理由ですが、遭難が多発したこと、朝貢品の負担が大きいことも、その理由ではなかったでしょうか。あえて多大な人的、物的犠牲を払ってまで、唐へ行く意味が薄れたのです。

一方、私貿易が盛んになります。朝鮮半島では新羅が覇権を握り、中国沿岸と交流を盛んにして、唐一新羅ー日本を結ぶ大規模な私貿易により、複雑な外交をしなくても、欲しいものが手に入る状況が生まれました。874年には、「入唐使」が派遣されました。「入唐使」とは、外交使節ではなく、下級役人で、香料や薬物を購入する使命を帯びて遣わされた使いです。

「唐の凋落」、「私貿易の普及」などが、やがて遣唐使派遣を中止する原因となりました。

### ■注

安史の乱(あんしのらん): 首謀者の安祿山は西域のサマルカンド出身で、ソグト人と突厥人の混血。貿易関係の業務で唐王朝に仕えて頭角を現し、宰相の李林甫に近付き、玄宗から信任され、さらに玄宗の寵妃・楊貴妃に取り入れることで、北方の辺境地域(現在の北京周辺)の三つの節度使(司令官)を兼任するにいたった。